エン・ゲヴ遺跡出土の宗教的モチーフが 描かれた印章

A Stamp Seal with Complex Religious Motifs from Tel 'En Gev, Israel

杉本智俊^{*}
SUGIMOTO David T.

ABSTRACT A stamp seal with complex religious motifs was unearthed from the tenth century BC stratum of Tel 'En Gev, Israel. This seal will be a valuable source for understanding the largely unknown religion of Geshur, a kingdom on the north-east border of Israel. In this article we analyze it and set it in the religious history of the region. The seal is a steatite, conoid-type stamp seal, a type which was probably introduced into the southern Levant by the influence of the Neo-Hittite culture at the beginning of the Iron Age. In the upper part, a degenerated tree of life is depicted between two facing animals; this probably reflects an early stage in the gradual disappearance of the tree of life motif during the Iron Age. The tree of life was identified with the fertility goddess during the Middle and Late Bronze Ages, but by the end of the Late Bronze Age, the goddess had disappeared from the iconography, and the relationship between the tree and the goddess was weakened. After Iron Age IIB, the tree of life itself became rare in the religious iconography of the region. Under the tree of life, a large horned quadruped suckling its young is engraved; this animal does not seem to be a recipient of the blessings of the tree of life, but rather an independent symbol of blessings. Two scorpions are also depicted; they were a symbol of fertility often used after the disappearance of the goddess. The combination of these figures suggests that a major religious change, especially with regard to the cult of the fertility goddess, was occurring during the beginning of the Iron Age, not only in Israel but also in the neighboring areas.

^{*} 慶應義塾大学教授
Professor, Keio University

1. 序 論

2010年夏にイスラエル国エン・ゲヴ遺跡で行われた発掘調査（慶應義塾大学イスラエル考古学調査団，団長・杉本智俊）において，複雑な宗教的図像の描かれた大型印章が出土した（図1，2）。出土層の年代は紀元前10世紀と考えられ，これまでほとんど知られていなかったゲシュル地方の宗教観を解明する貴重な資料となると思われる。⁽¹⁾ 本論文では，この印章を資料として提示すると同時に形状と図像の分析を行い，その宗教史的位置づけを明確化したい。

ゲシュルは，イスラエル統一王国成立時にダビデ王と政略結婚をし，同盟関係を結んでいた国である（Ⅱサムエル記13-19章）。当時イスラエルと周辺諸国の間にどのような関係があったのか，特にその宗教観にどのような共通点と相違点があったのかを知ることは，イスラエルにおける一神教の成立過程を解明する上で大きな意味を持つ。⁽²⁾ 本論文では，この印章をこれまでイスラエルおよびその周辺地域から出土した他の印章と比較しつつ分析する予定である。

2. 印章の出土状況

この印章は，上の町北西部に設けられた調査区のH地区D10グリッドから出土した（図3）。D10及びその隣のC10グリッドでは，鉄器時代に明確に時期の異なる2枚の漆喰層が検出され，下層の漆喰層のさらに下から3基のタンヌール（竈）を中心とした調理場の遺構が検出された。調理場の遺構からは，⁽³⁾ 多数の土器や炭化した植物遺存体も出土している。

D10グリッドでは，東側の高く立ちあがったタンヌールの東と南にほぼ直交する壁が検出されている。これらはそれぞれの下場の高さが異なるため，同じ層の中の短期間における年代の違いを反映している可能性もある。タンヌールの立ち上がり面と土器が検出された床面は，より低い東側の壁に接していた。南側の壁にとりつく床は未検出であるが，もし存在したとするなら，これらの設備を覆っていたように見える。この印章は，この南側の壁の下場のさらに下から多数の土器とともに検出された。このため，これはむしろ東側の壁に接する床面，すなわち調理場やそれに伴う土器や植物遺存体と同時期のものと判断することができる。

この層から出土した土器は外反した口縁やぶらさがり口縁を持つ調理鍋，襟

図1 エン・ゲヴ遺跡出土の印章

図2 印章の形状

図3 D11 グリッド：印章の出土地点

つきピトスなどの型式が中心で、鉄器時代Ⅰ期末からⅡA期前半（前11-10世紀）に年代づけられる。また、この層から出土したマメ科の植物遺体を放射性炭素年代で測定したところ、1026-930 cal BC (68%), 1112-910 cal BC (95%)⁽⁴⁾ という年代を得ている。

3. 印章の形状と素材

本印章は、縦 42mm、横 36mm の楕円形の印面をしており、高さ 35mm のコノイド型のスタンプ印章である（図 2 参照）。素材は滑石 *steatite* で、持ち手部分に段差はなく、全体に磨かれた際の擦過傷が認められる。上部中央には、横方向に直径 5mm の紐を通すと思われる穴が貫通している。印面には、手彫りで図像が描かれている。イスラエル出土の印章でこの大きさのものはあまり例がなく、彫られている図像も他のものより複雑で様々な要素を含んでいる。

ブキャナンとムーリー（Buchanan & Moorey, 1988: x-xv）は、鉄器時代以前の西アジアの印章を整理し、地域ごとに以下のような性格があると指摘している。(1)メソポタミアでは紀元前3000年紀から前8世紀までスタンプ印章はほとんど見られず円筒印章が主流だった、(2)エジプトではスタンプ印章が発達し、次第にスカラベ形のものに集約された、(3)ヒッタイトでは固い石に彫られたスタンプ印章が中心だった。シリアではこれら3つの様式が拮抗していたが、パレスチナでは後期青銅器時代にエジプト支配の影響が大きくなり、スカラベが主流となった。しかし、前1200年頃これらの大国が衰退すると、南レヴァントでもスタンプ印章が復活し、前8世紀にはメソポタミアにまでスタンプ印章がもたらされるようになった。この新しい様式の導入には、新ヒッタイト文化の伝統が影響した可能性が高い（Buchanan 1984: xiv; Keel & Uelinger 1998: 125. 杉本2009等参照）。

印章の素材も、後期青銅器時代にはファイアンスやガラス質のものが多かったが、鉄器時代になると石や骨に彫られることが一般化した。特に鉄器時代の前半にはドリルで赤鉄鉱のような固い石に彫ることが多く、後半には滑石や石灰岩のようなやわらかい石に回転式彫刻刀で彫るようになった。ブキャナンとムーリー（1988: 16）は、タフネル（1962）の説に従って、赤鉄鉱はアナトリアや北ユーフラテス地方で一般的な素材で、前2千年紀以降メソポタミアの円筒印章作成にも導入されたことを指摘している。この事実は、形状とともに素材に関しても、パレスチナにおけるスタンプ印章導入に新ヒッタイト文化の影響があったことを示していると言えるであろう。

4. 印章の図像

本印章の図像は、やや楕円形の印面を縦位置にして描かれている。上部中央には、太い縦棒とその上部から出る3本の枝分かれした線が彫られている。これはしゅろの木、すなわち青銅器時代の西アジアに広く見られる宗教的モチーフである「生命の木」が退化したものだと考えられる。枝部分の表現は、「生命の木」の図像として印章にしばしば見られる様式だからである。その両側には、幼獣を伴わない角のある四足動物が「生命の木」に向かって立っており、頭部は正面（上）を向いている。左側の動物の角は前に突き出しており、右側のものの角は後ろに向かっている。右側の動物のさらに右側、動物の姿勢からすると上側には、もう一頭の四足動物が描かれており、これにも幼獣はいない。角あるいは耳は短く、尾は立って前に折り返している。

印面の下方には、角の長い四足動物が大きく一頭だけ描かれており、腹の下には乳を吸う幼獣がいる。幼獣の頭は母親の腹と接しているが、後ろを振り返った状態で描かれている。さらに、この大きな四足動物の正面と背中の上には、サソリがそれぞれ1点ずつ描かれている。サソリは、胴部を表す縦線と足を表す4-5本の横線で表現されており、端には針を表す二本の孤が描かれている。

鉄器時代のイスラエルから出土した印章については、シュバル (Shuval 1990) およびケール (Keel 1998. Keel & Uelinger 1998 も参照) が集成・研究を行っているので、ここではそれらを参考の一つずつの図像要素を分析していきたい。

a. 生命の木

四足動物を両側に配し、形式化されたしゅろ（ナツメヤシ）の木を描く「生命の木」のモチーフは中・後期青銅器時代のカナンの印章や土器に非常に一般的で、「しゅろとカモシカ」のモチーフと呼ばれている（図4）。木の枝からはしたたり落ちる水が蛇行する線としてしばしば描かれ、魚が加えられる場合もある。木の代わりに、女性器や豊穡の女神自身が描かれることも多く、生命の木は、カナン世界において豊穡女神や女性器の互換可能な象徴として機能していたことが広く認められている (Keel 1998: 20-36. 特に30-36; 杉本2010: 25-27も参照)。

図4 青銅器時代に見られる「生命の木」のモチーフ

a. ゲゼル出土の印章（中期青銅器時代）Keel 1998, fig. 26; b. ラキシシュ出土の印章（中期青銅器時代）Keel 1998, fig. 22; c. テル・エル・アジュール出土の金製ペンダント（中期青銅器時代）Keel 1998, fig. 17; d. キブツ・レヴァディム出土の土偶（後期青銅器時代）, Keel 1998, fig. 52; e. メギド出土の土器（後期青銅器時代）Loud 1948, pl. 64.4; f. テル・エル・ファラ（南）出土の土器（後期青銅器時代）Starkey & Harding 1932, pl. LVIII

ところが、鉄器時代Ⅰ期になると、印章に女神や女性器は描かれなくなり、その象徴である「生命の木」のみが用いられるようになる（図5a, b⁽¹⁰⁾）。さらに鉄器時代ⅡA期になると、木が描かれることも稀になり、乳を吸う幼獣を伴った四足動物だけが描かれることが多くなる（図5c-g）。木が描かれる場合も、小さく表現されたり、左右対称の中心でなく端に描かれるようになる。シュバル（1990：103-110）は、具体例をあげつつこのプロセスを示している。ケール

図5 南レヴァント出土の鉄器時代の印章

a. Keel 1998, fig 66 (タアナク出土, 鉄器時代 I 期); b. Keel 1998, fig. 67 (出土地不明, 鉄器時代 I 期); c. Shuval 1990, fig. 92 (ドル出土, 鉄器時代 I 期); d. Shuval 1990, fig. 95 (出土地不明, 鉄器時代 IIA 期); e. Shuval 1990, fig. 93 (ゲゼル出土, 鉄器時代 IIA 期); f. Keel & Uelinger 1998, fig. 175a (メギド出土, 鉄器時代 IIA 期); g. Keel & Uelinger 1998, fig. 176c (ベト・シメシュ出土, 鉄器時代 IIA 期); h. Keel 1998, fig. 90 (ベト・シャン出土, 鉄器時代 IIB 期); i. Keel 1998, fig. 93 (キプロス島キティオン出土, 鉄器時代 IIC 期)

ル（1998：39-46; Keel & Uelinger 1998: 141-144, 205-206）も同様の証拠を示した上で、これは擬人的な表現を避けるこの時代の傾向と合致しており、生命の木と女神の直接的関係が薄まったことを反映している⁽¹¹⁾としている。

こうして退化した生命の木には、流れ出す水が描かれることはなく、四足動物もその受益者というより独立した存在として描かれるようになる。子に乳を吸わせる動物の姿は、生命の木から豊穡の恵みをもらう必要がなくなったことを示している。おそらくこの時期の「生命の木」には遠い豊穡の女神の記憶が残っていたかもしれないが、実際には単なる「祝福」の象徴以上の意味は持たなくなっていたと思われる⁽¹²⁾。ケール（1998：42-46, fig. 79-96）は、さらに鉄器時代 IIB 期（前 9 世紀）以降「生命の木」はほとんど描かれず、描かれる場合はむしろ男性神との関係で描かれるようになったことを示している（図 5h, i）。

王国成立以前のイスラエルには、木を中心とした聖所があり（例、マムレ [創世記18章]、シェケム [創世記12：6；35：4；申命記11：30]；ベエル・シェバ [創世記21：33]；ナフタリのカデシュ [士師記 4：11]；オフラ [士師記 6 章]），イスラエル王国時代の「高き所」にも木が立っていた（I 王14：23；II 王17：10；エレ 2：20等参照）ことが聖書に記されている。おそらく初期のイスラエルに聖木崇拜の伝統は存在したであろうが、それが豊穡女神と直接結びついていたかどうかは確かでない⁽¹³⁾。少なくとも、ここで示す印章や土器における図像の変化はそうした信仰が継続していたことを支持しない⁽¹⁴⁾。

本印章には矮小化された「生命の木」が描かれており、これはまさに青銅器時代から鉄器時代への変化、すなわち豊穡女神と生命の木の直接的関係が薄れ、生命の木自体も強調されなくなる現象を反映したものと言えるであろう。この印章が、前10世紀の層から出土している点も、このプロセス理解と合致している。興味深い点は、これがイスラエルではなく、その外に位置するゲシュルから出土していることである。議論はあるにせよ、イスラエルにはヤハウェ一神教が導入されていた可能性があるが、その周囲の国でも「生命の木」と豊穡女神の関係が薄れていたことは注目に値する。ゲシュルがイスラエルのヤハウェ宗教の影響を受けていた可能性も否定できないが、むしろこれはこの時期のイスラエル周辺に広く見られる傾向だと考えられる。「生命の木」を男性神と結びつける現象も鉄器時代後期にキプロス（図 5i. Keel 1998: 45-46, figs. 90, 93 参照）からアッシリア（Giovino 2007 参照）まで認められるからである。

b. 角のある四足動物と乳を吸う子

中・後期青銅器時代のレヴァント地方では、豊穡女神やその象徴としての「生命の木」の両側にカモシカと思われる四足動物がしばしば描かれた（図⁽¹⁵⁾4）。しかし、鉄器時代Ⅰ期になると、上述のように女神は描かれなくなり（図5a, b）、何も中心がない所あるいは矮小化された「生命の木」の両側に乳を吸う子を伴う四足動物だけが描かれるようになった（図5c, d）。動物の図像は様式化されており、厳密にどの種の動物を表現しているのか判然としなくなる。⁽¹⁶⁾これらの動物は、豊穡女神の特定の侍獣というよりも、乳を吸う行為そのものに強調点があるように思われる。鉄器時代Ⅰ期には、青銅器時代の伝統の通り、母親獣が首をひねり後ろを向いている場合が多いが、次第に正面を向くようになる。⁽¹⁷⁾中心が失われたので、四足動物も必ずしも左右対称に描かれる必要はなくなり、上下など自由な配置で描かれたり、一組だけが描かれる例が増加する（図5e-g. 後述のようにサソりを伴う場合も多い）。鉄器時代Ⅱ期以降では、四足動物が一頭だけ描かれ、子を連れていない例も一般的になる（図5g）。

この変化も、豊穡や祝福の図像が次第に女神や女性という概念から切り離されたことを示している。女神や生命の木が描かれなくなることはもちろん、母親が子を気遣って後ろを向く姿は表現されなくなり、授乳行為より角のある四足動物の存在だけが強調されるようになるからである。また次第に幼獣が描かれなくなるので、図像だけでは四足動物の性別はわからなくなり、大きな角はむしろ男性的な印象さえ与えるようになる。ケールとユーリンガー（1998：141等）は、この変化は女神との直接的な接点がなくなり、「女神の領域」the sphere of the goddess だけが残った状態を表すとしている。

本印章では、小さな「生命の木」の両側に角のある四足動物が向き合って描かれている。まだ「生命の木」の残滓が残っていることは、この印章が上述の変化の初期段階に属することを示している。しかし、その下には、乳を吸う子を伴った大きな角を持つ四足動物が描かれており、豊穡や祝福の象徴が生命の木から授乳する動物に移りつつあったことを反映している。この動物が一頭のみで描かれていることも、すでにこれが「生命の木」から祝福を受ける動物ではなく、独立した意味を持つ存在になっていたことを示している。また、この動物が正面を向いていること、立派な孤を描いた角を持っていることも、後期

青銅器時代の伝統から離れていることを示しているであろう。

この変化は、「生命の木」の右側の動物のさらに右側にもう一頭の動物が描かれ、左右対称の原則を破っていることにも反映されている。これらの動物の角や尾の角度はそれぞれ異なっており、厳密にどの種の動物を表しているのか限定できない。そういう意味でも、これらの四足動物は生命の木の特定の侍獣としての性格をすでに失っていると言えるであろう。

c. サソリ

サソリも、後期青銅器時代から知られているモチーフであるが、鉄器時代I期以降のイスラエルで盛んになる (Shuval 1990: 103-110. 特に105)。シュバルによると、サソリの描かれたコノイド (円錐) 型印章は、エジプトからの影響の残る他の鉄器時代初期の印章 (A-D グループ) やシリア風のモチーフが描かれた印章 (E-H グループ) とは異なるグループ (I-K グループ) を形成していた。この型式の印章は鉄器時代の南レヴァントで主流となり、イスラエルでは鉄器時代 IIB 期 (前 8 世紀) まで、フェニキアでは前 2 世紀まで継続したとされる。

サソリは、カモシカや「生命の木」同様、メソポタミア、シリア、アナトリアでイシュタルと結びつけられ、豊穡を表していた (Shuval 1990: 103; Van Buren 1937-39: no. 1. Van Buren 1937-39: nos. 6, 22, 23 も参照)。エジプトでも、癒しの神セルキスがサソリと結びつけられ、イシスもサソリを頭に乘せた女性像として表現される場合があるが、この印章の形状、素材、他の要素との組み合わせを考えると、シリアの影響の方が直接的だったと考えるべきであろう。

サソリは、鉄器時代初期の印章では単独で描かれる場合もあるが、前述の通り、幼獣を伴う四足動物とともに描かれることが一般的である。次第に、動物のみが描かれてサソリが省略される場合も出てくる (Shuval 1990: 105)。しかし、サソリとともに描かれる動物が何であるかは必ずしも明確でなく、もっとも一般的なカモシカのような角の生えた四足動物以外にも牛やライオン、人物が描かれる場合がある (Shuval 1990: nos. 59-63)。

上述のように、鉄器時代以降、豊穡女神の図像は「生命の木」の図像で代替されるようになり、さらに授乳する四足動物の図像へと変化した。サソリの図

像は、豊穡女神が描かれなくなった後も、「生命の木」とともに豊穡あるいは祝福を表す象徴として機能したと思われる。しかし、角のある四足動物に焦点が移るにつれ、サソリの図像も「生命の木」の図像とともに消失した。豊穡や祝福の図像から女神や女性の要素が失われ、イスラエルではこうした概念がヤハウェに取り込まれていく中で、サソリは「生命の木」同様、それらの概念を表す象徴として過渡的に強調されたものと理解することができるであろう。

本印章には二匹のサソリが四足動物の周囲に配置されており、退化した「生命の木」とともにまだ青銅器時代の豊穡表現の伝統が残っていたことを示している。しかし、サソリの強調は女神自体が描かれなくなったことの裏返しであり、この印章が青銅器時代の表現を残しつつも、新たな意味を獲得しつつあった過渡期（鉄器時代 I-IIA 期）の例であることを反映しているであろう。

5. 結 論

以上の分析から、この印章の形状や素材は鉄器時代 I-IIA 期の南レヴァントに典型的なもので、新ヒッタイト文化の影響によって新たに導入されたものと考えられる（杉本2010bも参照）。図像学的にも、中・後期青銅器時代の女神とは異なる豊穡表現を採用しており、アナトリアや北シリアからの新たな文化的影響を反映していると見ることができる。

こうした変化は、鉄器時代 I 期から IIA 期のイスラエルに新たな宗教的環境が生まれた証拠として、すでに指摘されてきた（Keel & Uelinger 1998: 125. Keel 1990: 415-17; Knauf 1988 も参照）。女神が描かれなくなり、次第に「生命の木」も退化して角のある四足動物に変わる現象は、ヤハウェ一神教の確立に好都合だったと思われる。しかし、この現象がゲシュル地方でも確認されたことは、それがイスラエルに限定されるものでないことを示している。ゲシュル王国がヤハウェ一神教の影響を受けていた可能性も完全に排除することはできないが、むしろこの印章は、中・後期青銅器時代のカナンの世界観がこの時期を境にイスラエルとその周辺地域全体で大きく変化しつつあったこと示すものとも言えるであろう。

* 本論は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）「古代イスラエルにおける一神教の成立過程に関する考古学的研究」（課題番号20401033, 研究代表

者 杉本智俊)の成果の一部である。

注

- (1) 印章には出土状況が不明のものが多く、これらの研究の大きな障害となっている。本印章は出土位置と出土状況が明確に確定でき、その意味でも意義が大きい。
- (2) この時期の南レヴァントでは、イスラエルを始め、ゲシュル、アラム、アンモン、モアブ等様々な民族が定住、国家形成を始めた。後期青銅器時代の末(前1200年頃)西アジア全体を襲った文化中心地の崩壊の後、新しい世界秩序が生まれた時代である。
- (3) この地区全体の調査状況に関しては、Sugimoto (2010)及び杉本・間舎(2011, 2010)を参照されたい。
- (4) ㈱パリオ・サーヴィスによるデータ(Sugimoto 2010 参照)。現在、別の資料に関しても、イスラエル国ヴァイツマン研究所で検査中である。
- (5) ここではブキャナン(Buchanan 1984: xi-xviii)の型式分類に従う。「コノイド型」を直訳すると「円錐型」になるが、実際に円錐形をしているものはむしろ稀で、本印章のように頭頂部が丸くなっているものもこの分類に含まれている。ケール(1995)は、より最近の分類でコノイド型をさらに細分したが、それによると本印章はコノイドⅡ型となる。
- (6) たとえば、ブキャナンが分類したアシュモレアン博物館(1966, 81, 88)やエール大学(1981)所蔵の同時期同型式の印章は、ほとんどのものの長径が20mm程度かそれ以下であり、本印章の半分程度の大きさである。
- (7) かつて日本隊が調査をしたテル・ゼロール遺跡でも、ほぼ同時期の層位(A地区第Ⅸ層、前10世紀後半から前9世紀初期)から「生命の木」の描かれた印章が出土している(後藤1975: 図Ⅳ1 参照)。これも「凍石」、つまり滑石製で、形状は持ち手部分に段差があるため「スカロポイド形」と報告されているが、実際には本印章と非常によく似ている。大きさは33mm×27mmと比較的大型であるが、本印章よりは小さい。図像は横位置に描かれており、中央に生命の木と向かい合う四足動物が描かれているが、それ以外には小さな模様が2点見られるのみである。
- (8) ここでいう「新ヒッタイト文化」とは、鉄器時代になった後も前二千年紀のヒッタイト王国の伝統を継承した文化を意味しており、その民族的同定は問題としていない。新ヒッタイト都市は鉄器時代Ⅰ期にアナトリア南東部から北シリアにかけて形成されたが、次第にアラム人との接触が増えるようになった。アラム人が新ヒッタイトの物質文化の多くを受け入れたこともあり、両者の区別は容易ではない。アラム人が前10世紀初頭の南レヴァントですでに勢力を確立していたことを示す証拠は存在しないが、同時にヒッタイト系民族の存在を証拠立てることも容易ではない。ここでは、民族的な意味合い抜きで文化的側面のみを議論している。
- (9) ただし、鉄器時代の中の時代差を確実に示す証拠はあきらかにされていない。
- (10) テル・ゼロール出土の印章(後藤1975: 図Ⅳ1)には、「生命の木」とそれに向き

合う四足動物が左右対称に描かれている。ここで示す図像の変化から考えると、報告者の示す出土層位の年代（前10世紀後半から前9世紀初期）より若干古い（鉄器時代Ⅰ期）様式のように思えるが、その伝統がまだ継続していたのかもしれない。後藤は、これがミタンニ様式の影響であるとし、後期青銅器時代の図像との関連性を指摘している。ただこの印章の「生命の木」も根元部分は省略されているように思われ、そういう意味では退化に向かう方向性が反映されているのかもしれない。「生命の木」の図像が鉄器時代になると簡略化されることは、後藤自身も指摘している（後藤1976：18）。また、この印章にもサソリのような図像が認められることは興味深い（以下4.c.の議論参照）。

- (11) この傾向は印章だけではなく土器にも認められ、筆者（杉本2010a）は鉄器時代以降わずかに知られる「生命の木」の描かれた土器図像の意味が変化したことについて、すでに指摘している。
- (12) さらに後期青銅器時代の土器でも、「生命の木」はしばしば省略されたり雑に描かれており、直接的に女神を表現しているというよりも単なる祝福の象徴となっていたことをチョイは指摘している（Choi 2008: II, IV章参照）。
- (13) 聖書学や宗教史学では、カナンの豊穡女神アシェラがイスラエル王国時代の末期まで礼拝されていたとする立場もしばしば主張される（最近の例では、Dever 2005。反論として Ahituv 2006 等参照）。しかし、聖書中に用いられている「アシェラ」という語の大半は、「立てる」「切り倒す」などという動詞とともに用いられており、女神ではなく人工物を表すことがあきらかである。また、クンティレト・アジュールドやヒルベト・エル・コム出土の銘文に「ヤハウエとそのアシェラ」という表現があったことから、アシェラはヤハウエの配偶神だったとする説も主張されることがあるが、これも文法的に難しい。今でもこの説を唱える者の多くは、ヤハウエの祭具としての聖木が間接的に女神を記憶させたことを主張する（たとえば、Hadley 2000）。しかし、仮にそうであったとしても、少なくとも建前上この聖木はすでにヤハウエの属性の一部となっていたのであり、直接的にはヤハウエの豊穡的側面あるいは単なる祝福の象徴だったと理解されるべきであろう。このことは、印章の「生命の木」が男性神と結びつけられるようになる現象や聖書で豊穡の力や「生命の木」（例えば、「エデンの園」創世記2：9；3：24）が完全にヤハウエの属性の一部に取り込まれていることと合致している（詳しくは、杉本2010a参照；Delcor 1974; Loretz 1990 86f. も参照）。
- (14) シュバル（1990：110）は、女神が擬人化して描かれなくなったことを認めつつも、I. ジンガーの意見にならい、生命の木が女神を意味し続けたとする。しかし、そのことを示す積極的な考古学的証拠はない。
- (15) 牝牛と子牛の組み合わせやカモシカは、2千年紀前半からシリアではイシュタルの象徴として一般的に用いられてきた（Van Buren 1945: 36）。
- (16) 子の頭と親の腹も一体化してしまっている。
- (17) たとえば、後期青銅器時代のシリアから出土する象牙細工のモチーフを参照され

たい。

参考文献

- Ahituv, S. 2006: "Did God Really Have a Wife?" *BAR* 31, 2-32.
- Buchanan, B.: 1966 *Catalogue of Ancient Near Eastern Seals in Ashmolean Museum I: Cylinder Seals*, Oxford: Clarendon Press.
- Buchanan, B. 1981: *Early Near Eastern Seals in the Yale Babylonian Collection*, New Haven: Yale University Press.
- Buchanan, B. 1984: *Catalogue of Ancient Near Eastern Seals in Ashmolean Museum II: The Prehistoric Stamp Seals*, Oxford: Clarendon Press.
- Buchanan, B. & P. R. S. Moorey, 1988: *Catalogue of Ancient Near Eastern Seals in Ashmolean Museum III: The Iron Age Stamp Seals (c. 1200-350 BC)*, Oxford: Clarendon Press.
- Choi, G. D. 2008: Decoding Canaanite Pottery Paintings from the Late Bronze Age and Iron Age I, Ph. D. Thesis, The Hebrew University of Jerusalem.
- Day, J. 2001: *Yahweh and the Gods and Goddesses of Canaan* (JSOTS 265), Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Delcor, M. 1974: "Astarté et la fécondité des troupeaux en Deut. 7, 13 et parallèles," *UF* 6, 7-14.
- Dever, W. G. 2005: *Did God Have a Wife?: Archaeology and Folk Religion in Ancient Israel*, Grand Rapids, MI: Eerdmans.
- Giovino, M. 2007: *The Assyrian Sacred Tree: A History of Interpretation* (OBO 230), Fribourg/Göttingen: Universitätsverlag/Vandenhoeck & Ruprecht.
- Hadley, J. M. 2000: *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah: Evidence for a Hebrew Goddess*, Cambridge University Press.
- Hogarth, D. G. 1920: *Hittite Seals with Particular Reference to the Ashmolean Collection*, Oxford: Clarendon Press.
- Keel, O. 1995: *Corpus der Stempelsiegel-Amulette aus Palästina/Israel: Von den Anfängen bis zur Perserzeit: Einleitung* (OBO Series Archaeologica 10), Freiburg/Göttingen: Universitätsverlag/Vandenhoeck & Ruprecht.
- Keel, O. 1998: *Goddesses and Trees, New Moon and Yahweh* (JSOTS 261), Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Keel, O. & Ueling, C. 1998: *Gods, Goddesses, and Images of God in Ancient Israel*, Minneapolis: Fortress Press.
- Knauf, E. A. 1988: "Zur Herkunft und Sozialgeschichte Israels. 'Das Böckchen in der Milch seiner Mutter'," *Biblica* 69, 153-169.
- Lang, B. 1983: *Monotheism and the Prophetic Minority*, Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Loretz, O. 1990: *Ugarit und die Bibel: Kanaanäische Götter und Religion im Alten Testament*,

- Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- McGovern, P. E. 1985: *Late Bronze Age Palestinian Pendants: Innovation in a Cosmopolitan Age*, Sheffield: JSOT Press.
- Porada, E. *Corpus of Ancient Near Eastern Seals in North American Collections*, 2 vols., Washington, D. C.: Pantheon Books.
- Shuval, M. 1990 "A Catalogue of Early Iron Stamp Seals from Israel." In O. Keel, M. Shuval, & C. Uelinger (eds.), *Studien zu den Stempelsiegeln aus Palästina/Israel, Band III Die Frühe Eisenzeit: Ein Workshop* (OBO100) Freiburg/Göttingen: Universitätsverlag/Vandenhoeck & Ruprecht: 69-16.
- Sugimoto, D. T. 2008: *Female Figurines with a Disk from the Southern Levant and the Formation of Monotheism*, Tokyo: Keio University Press.
- Sugimoto, D. T. 2010: "'En Gev, Preliminary Report," in *Hadashot Arkheologiyot* 122.
(http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.asp?id=1382&mag_id=117)
- Van Buren, E. D. 1937-39: "The Scorpion in Mesopotamian Religion and Art," *AfO* 12: 1-28.
- Van Buren, E. D. 1945: *Symbols of the Gods in Mesopotamian Art* (AnOr 23), Rome: Pontifical Institute.
- Winter, U. 1983: *Frau und Göttin* (OBO 53), Freiburg/Göttingen: Universitätsverlag/Vandenhoeck & Ruprecht.
- 後藤光一郎 1975:「テル・ゼロール出土の一印章」, 日本オリエント学会編『三笠宮殿下還暦記念オリエント学論集』147-154.
- 後藤光一郎 1976:「パレスチナに於けるミタンニ文化の影響」『オリエント』19-1: 17-31.
- 杉本智俊 2009:「古代イスラエルの宗教関連考古遺物と一神教の成立過程」市川裕他編『宗教史とは何か(上巻)』リトン, 229-266.
- 杉本智俊 2010a:「イスラエル鉄器時代出土土器に見られる「生命の木」の意義」『オリエント』52-2: 23-46.
- 杉本智俊 2010b:「ゲシュルの地と新ヒッタイト文化」月本昭男他編『エン・ゲヴ遺跡——発掘成果報告1998-2004』リトン, 195-238.
- 杉本智俊, 間舎裕生 2010:「2009年度エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)における発掘調査」『史学』79-1, 2: 87-114.
- 杉本智俊, 間舎裕生 2011:「2010年度エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)における発掘調査」『史学』80-1: 71-89.